

市民文教委員会調査視察報告書

令和8年7月

日 程	令和8年7月28日（火）9：30～15：10
視察先	・聖母の小さな学校
	・みんなの居場所 彦一郎
	・よのなか塾
	・舞鶴市教育支援センター「明日葉」
参加委員	谷川 眞司（委員長）、仲井 玲子（副委員長）、伊田 悦子、上羽 和幸、眞下 隆史、水嶋 一明
調 査 概 要	
〈 視察に至る背景と目的 〉 不登校児童生徒への対策のため、舞鶴市では学校及び教育支援センター「明日葉」での支援を軸に、民間フリースクール3施設と連携して取り組んでいる。その不登校対策の現場（計4施設）を実際に視察させていただく。 また、施設関係者の現場の思いも聞かせていただきながら意見交換し、現状を把握するとともに、本年10月に予定している「第7次舞鶴市総合計画・後期実行計画」の関連する項目に対する点検評価及び市への政策提言につなげることを目的として実施する。 【聖母の小さな学校】 〈 対応いただいた方 〉 代表者様他4名 〈 委員の所感 〉 ・聖母の小さな学校は、不登校の子どもたちに学びの場を提供することを目的として、1989年に創設された京都府教育委員会認定のフリースクールである。学校に通うことが難しい子どもたち一人ひとりに寄り添い、学習だけでなく社会性や生活習慣を身に付けることを重視した教育活動を行っている。 ・昨年度は、中学生及び高校生が在籍し、年間221日開校した。また、京都府の研究委託事業や舞鶴市の事業委託を受けるとともに、行政との連携を図りながら運営が行われている。 教育活動では、学力の向上だけではなく、他者と良好な人間関係を築く力や、社会の中で自立して生活していくための力を育むことを重視している。子どもたちは日々の活動を通じて、基礎的な生活習慣を身に付けるとともに、自ら考え行動する力を養い、「生きる力」の育成につなげている。	

・また、子どもへの支援だけでなく、保護者への支援も大切にされており、定期的な個人面談や保護者会を開催し、家庭と連携しながら子どもの成長を支える体制が整えられている。

同校では、次のような生徒像を目標として教育活動を展開している。

- * 基礎的な生活力を身に付けていること
- * 人と関わり、良好な人間関係を築く力を持つこと
- * 社会参加ができる力を身に付けること

・舞鶴市においても、学校・フリースクール・家庭・行政が連携し、それぞれの子どもの状況に応じた多様な学びの場を確保するとともに、安心して社会参加へとつながる支援体制の一層の充実が必要であると感じた。

・代表者様をはじめ、元学校の教員をされていた先生方が積極的に関われ、子どもの心に寄り添った「引き戻し」をされていることに感動した。改めて教師というご職業は、時間給ではない「志」のある情熱を持ったご職業であると感じた。先生との関係につまずいて不登校になる子どももいるかと思うが、聖母の小さな学校で、もう一度「先生との信頼＝大人への信頼」を回復することで、心にエネルギーを溜めて、自分の世界に閉じこもっていた子どもの外に出る原動力となっているようだ。不登校で長年悩まれたお母様からのお話も伺うことができて、「子どもの学びの場は学校だけではない」「不登校は恥ずべきことではない、子どもは主体的に学びの場を選ぶ権利がある」ことを社会全体で受け入れていくべきだと感じた。

・民間フリースクールへの財政支援はまだ弱いと感じる。自主的で特徴を活かしての活動や運営に対し、「お金は出しても口は出さない」こうした立場での支援というのが必要ではないかと思う。

・聖母の小さな学校については、今までにもシンポジウムや直接代表者様からお話しを伺う機会が議会の中でもあったが、ご苦勞いただきながらも誠実に、不登校の子どもを支援いたしていただいている様子を改めてお聞かせいただいた。今回は初めて施設を訪問させていただき、施設の老朽化も進み、維持管理にもご苦勞されていることが分かった。時間があれば、維持管理の収支状況などもお聞きしたかったところである。

・じっくりとお話を聞かせていただき、設置の経緯や活動の意義、国・京都府・舞鶴市との連携状況が充実してきた経過をしっかりと把握させていただいた。市内にこうした特化した施設が共存していることは誇りであり、素直に感謝を述べたい。今後の市民全体で支える重要性を、そのように実践していけるのか、市行政や議会を通じて検討し協力していく必要があると強く感じた。

・お話を聞き同感と強く感じたのは、子どもの期間はしっかりと大人と関わる環境整備が一番大切であることが共感でき、私自身の想いを变えず今後も活動していく決意と繋がった。

・聖母の小さな学校は、1989年（平成元年）不登校児童生徒のための民間教育施設として開設。以来、特に家の外に出られない不登校児童・生徒達を対象に、興味を持ち、家から出やすくするため、体験を重視したカリキュラムを作成、生きる力を育む教育に取組まれている。

・平成28年（2016年）から京都府教育委員会「フリースクール連携推進事業」の委託により、舞鶴市教育委員会と連携を主とした研究に取り組まれるなど全国に先駆けて取組を進められている。

〈 視察を実施した効果等 〉

・舞鶴市においても、学校・フリースクール・行政・福祉・地域団体が連携し、多様な学びの保障と切れ目のない支援体制を充実させるとともに、学校外での学びを社会全体で支える環境づくりを推進していくことが必要であると感じた、大変有意義な視察となった。

・不登校の児童生徒の中でも、とりわけデリケートな子どもたちの「心の居場所」となっている「聖母の小さな学校」は、地域において欠かすことのできない不可欠な存在である。「学校という集団の場所」の中で傷ついた子どもたちを癒す場を確保することは、本市にとっても重要な課題である。

・同校が存続する上での課題を的確に把握し、行政として適切なサポートが行えるよう、他部署とも密に連携していく必要がある。各フリースクールが多様な役割を担う中、子どもたちの「いのちの安全基地」とも言える「聖母の小さな学校」を守っていくために、市・行政のみならず、市民全体でその在り方を考えていくことが重要だ。

・フリースクール通学支援に対する補助を舞鶴市は近年実施しているが、利用者の費用負担ができない家庭が多いようであり、まだまだ維持をするには厳しい環境にある。歴史あるこの施設を必要とする市民も多く、今後の維持にはしっかり相談していく必要がある。

・教育委員会には、全国に誇れる施設が市内にあることを隠さず、明るくPRできる環境整備に努められたい。

・今後も素晴らしい取組を進めていただきその成果を全国に発信していただき、本市の不登校児童生徒の解消にもお力添えをお願いしたい。



【 みんなあの居場所 彦一郎（ぼちぼちいこか） 】

〈 対応いただいた方 〉

代表理事様他2名

〈 委員の所感 〉

・「ぼちぼちいこか」は、不登校や学校生活に不安を抱える子どもたちが安心して過ごせる居場所として運営されており、次の3つの理念を大切にされている。

1. 安心して過ごせる「居場所」づくり
2. 一人ひとりのペースに合わせた「多様なまなび」の提供
3. 子ども自身が「未来を選び取る力」を育むこと

・施設では、子どもたちが無理をすることなく、自分の気持ちや体調に合わせて自由に過ごすことができる環境が整えられていた。広々としたスペースの中で、それぞれが思い思いの場所を見つけ、学習や読書、楽器、会話など、自分に合った時間を過ごしている姿が印象的だった。

また、在籍する学校の校長が承認した場合には、施設の利用が「出席扱い」となる制度が活用されており、学校との連携を図りながら子どもたちの学びを支えている点も大きな特徴である。

・支援体制については、教育・心理の専門家をはじめ、高校生ボランティアや NPO スタッフが連携し、子どもたち一人ひとりに寄り添った支援を行っている。多様な立場の支援者が関わることで、子どもたちが安心して相談できる環境づくりが実践されていた。活動は、現在は週 1 回、15 時 30 分から 17 時 30 分まで実施されており、利用料金は月額 6,000 円となっている。

・広い庭や畑も備えた大きなお屋敷で、中高生が小学生に勉強を教えあうなど、子どもたちが心穏やかに有意義な夏休みを過ごしている様子を拝見した。

・一方、余内地域の放課後児童クラブの現状と非常に対照的であるとも感じた。同クラブでは 2 クラスそれぞれに 30 人以上の子どもたちが在籍しており、暑さのため運動場で遊ぶこともできず、教室以外では廊下や渡り廊下、裏庭で走り回っている。そうした集団生活の中では、主張の強い声におされて自己表現がうまくできない子どもが居場所を失ってしまうケースも見受けられる。

・フリースクール「彦一郎」は、そうした集団の環境からこぼれ落ちてしまう子どもたちや、静かで落ち着いた環境を必要とする子どもたちにとって、かけがえのない大切な居場所（受け皿）となっていることを強く実感した。

また、ご家庭との連携や子ども食堂との連携など、子どもたちを取り巻く環境への多面的な取り組みを実践されている点において、大変意義深い活動であると感じた。

・こちらは現職の教職員の方が運営されているとのこと、週 1 回の実施であるが、保護者の同意のもとで学校とも連携されている。



・建物は歴史ある建造物で広いため、子どもたちにとっても余裕のある環境のようである。また、ボランティアの高校生が多いことには感心した。

・実施も継続も現在では運営されている方々の熱意で保たれている様子であり、補助を活用しながら持続可能な支援の場となることを願うものだ。

・初期の不登校児童生徒の発見（気づき）に、大変有効な施設であることを確認でき、市内各所にこうした施設が必要であると強く感じる。スタッフの確保や、事業費の捻出ができる仕組みづくりが難しいとは考えるが、こうした課題に積極的に取り組むことが重要であることは間違い無い。

・ただの子どもの居場所としてではなく、絵描きや造形（箱庭）を活用し心理のスタッフが常駐されている強みは、大変すばらしいと感じた。スタッフの皆さんが明るく関わられている感じが伝わり、多くの高校生を巻き込まれている先進的な活動であると感じた。

・令和 7 年 4 月から不登校児童生徒（不登校でなくても利用可）との居場所として、週 1 回木曜日の 15 時 30 分～17 時 30 分まで開設されている。月額 6,000 円の利用料金が必要。現在 2 名の小学生が利用されているが、週 1 回の開設であることから、指導要領や対応が気になるところである。

〈 視察を実施した効果等 〉

・舞鶴市においても、不登校児童生徒が安心して過ごせる居場所づくりや学校・家庭・地域が連携した支援体制の充実について、今後の施策の参考となる大変有意義な視察となった。

・子ども食堂との連携などを通じて、ご家族が抱える課題を多面的に捉えていらっしゃる様子を把握でき、今後は福祉分野との連携強化も重要であると認識した。

・現在、子どもの居場所「ぼちぼちいこか@ひこいち」は、週 1 回の開催とのことだが、今後運営スタッフの体制強化を図ることで、より多くの日数の開催ができるようになることが期待される。行政としても子どものニーズをしっかりと把握し、現場に寄り添ったサポートしていくべきと考える。

・個別の支援についても様子を知ることができ、理解が深まった。

・こうした施設運営が増えることは、確実に課題解決に向けた有効な取組であるため、運営していただける人材探しが市にとって大きな施策になってくる。高校生を巻き込まれていることもヒントにし、団体や人探しの強化を市に対して期待する。

【よのなか塾】

〈 対応いただいた方 〉

代表者様

〈 委員の所感 〉

・よのなか塾は、特定非営利活動法人と非営利株式会社の両組織を運営し、不登校や高校中退、進路に悩む子ども・若者を対象に、多様な学びと自立支援を行っている。フリースクール、高等学院、若者支援事業など幅広い事業を展開し、一人ひとりの状況に応じた支援体制を構築している。

・よのなか塾では、「よのなか塾高等学院」（代々木高校京都サテライト）」と「よのなか塾」フリースクールを運営しており、「よのなか塾高等学院」は、週 1 日の東舞鶴への通学で 3 年間の高校卒業を目指すことができる。また、生徒の希望や進路に応じて、「ベーシックコース」「特別進学コース」「グローバルコース」「デジタル創造コース」「探究コース」の 5 つのコースを設け、多様な学びを提供している。

・中学生を対象としたフリースクールでは、一人ひとりのペースを尊重しながら、自分自身で将来の進路を考え、選択できるよう支援が行われている。学校復帰だけを目的とするのではなく、それぞれに合った進路の実現を目指す支援が特徴だった。

・また、「若者の『望まない孤独』支援モデル形成事業」では、夜間に安心して過ごせる居場所を提供し、学習支援、食事の提供、カウンセラーによる相談支援を実施し、週 6～7 日、午後 5 時から午後 10 時まで開設し、1 日当たり 10～30 名の若者が利用しており、孤立や生活困窮、学習機会の不足など、若者が直面する様々な課題に対して具体的かつ実践的な支援を行っていることが高く評価されていた。

・このほか、「高校生世代の子育て家庭『くらしと学びの危機』緊急支援事業」や「地域若者サポートステーション事業」なども実施し、教育だけでなく就労や生活までを含めた包括的な支援を展開していた。

・一方で、今後の課題として、進路の選択肢や各種奨学金制度に関する知識をスタッフ間で共有するための研修を充実させるとともに、子どもたちが自ら進路を選択しやすく

なるよう、進学・就職に関する情報を可視化した資料の整備が必要であるとされていた。また、支援スキルの標準化を図り、すべてのスタッフが質の高い均一な支援を提供できる体制づくりも重要な課題となっている。

・さらに、フリースクールなど学校外の学びの場を社会全体に広く理解してもらい、多様な教育の選択肢として一般化していくことや、行政・学校・関係団体との連携を一層深め、地域全体で子ども・若者を支えるネットワークを構築していく必要性が示されていた。

・同校が代々木高校北京都サテライト校であることを伺い、本市における公立 2 校、私立 1 校に次ぐ、「4 校目の高校」として重要な役割を担っているとの認識を新たにした。視察時に学びに来ていた生徒は高校生が多く、落ち着いた雰囲気の中で質の高い「学びの空間」が確保されていることを実感した。

・また、休眠預金等活用事業（急増する「不登校・長期欠席の子どもたち」支援モデル形成事業）に採択されて事業資金を獲得し、特定非営利活動法人および非営利株式会社として法人化を図られている点は、持続可能な運営基盤を構築するうえで大変優れた取り組みであると高く評価する。

・子ども食堂等の児童生徒支援から、15～49 歳を対象とした就職支援に至るまで、幅広い活動を通じて対象者の年代に応じた課題解決にきめ細かく伴走されている姿に感銘を受けた。



・3 か所のフリースクールはそれぞれの特徴があり、多様な選択肢があることはいいことだと思った。また、教育機関（学校）との連携が重要であるということも感じ、そういった点での体制づくりも必要ではないかと思う。

・このフリースクールは通信制高校や大学も経営されており、また法人化されていることから個性の違う現代的なフリースクールのように思えた。

・また、授業料も市内の他の施設よりも徴収されているが、説明では都市部のフリースクールに比べると僅かであると説明いただいた。

・運営者は支援に対するノウハウも持たれているようで、また経営の手腕などもお持ちのようなので、持続可能な受け入れ先として存在いただくことに期待したい。

・まずは、分かり易くフリースクールの典型を実現されている施設であり、その効果も実績も積み上げられていることを感じ取ることができた。実際にスタッフの確保から活用方法、資金の調達から運営に関し、民間によって実施される大変さを理解するとともに、頭が上まらない素晴らしい施設があることに感謝しかない。こうした施設が、市内に多くできることは不可能であり、既存の施設と市が綿密に連携・強化し、運営が可能であるシステムづくりが必要である。

・お話を聞かせていただき、「学校復帰ありきでないこと」「子どもたちのエネルギーを観察・見極めすること」「市の補助に頼りすぎないこと」と、現在の活動にプライド

と必要性・覚悟を強く感じた。すでに、多くの子供たちの拠り所になっていることは事実であり、市との関りの中で役割分担を協議・強化をし、誰一人取り残さない環境の整備に今後も取り組みの継続をお願いしたい。

・よのなか塾は、「特定非営利法人よのなか塾」「非営利株式会社よのなか塾」として学習費用補助事業や休眠預金等活用事業等を活用し事業を積極的に展開されている。よのなか塾高等学院は代々木学園の広域通信制高等学校実施校として通信教育で単位を取れることから、令和7年9月1日現在127名在籍、うち舞鶴市の生徒は74名で全体の8割強の生徒が小中高での不登校経験者であった。高校生の受入や大学進学之道もつくってあることを確認できてよかった。

〈 視察を実施した効果等 〉

・今回の視察を通じて、不登校支援は学校教育だけで完結するものではなく、学び、生活、就労、家庭支援を一体的に進めることが重要であることを改めて認識した。また、夜間の居場所づくりや相談支援、食事の提供など、子どもや若者の孤立を防ぐ取組は、安心して社会参加へつながるための重要な支援であると感じた。

・N 高等学校や S 高等学校をはじめとするネット高校の利用生徒が急増するなか、よのなか塾高等学院・代々木高校北京都サテライトは通信制でありながら対面による丁寧な学習指導を実施しており、対人関係等の課題から学習機会を逸していた生徒にとって貴重な「学びの場」となっていることを確認した。

・こうした制度や取組を多くの市民に周知し、全日制等の登校型高校への適応が困難であっても多様な受け皿が存在することを広く伝えるとともに、生徒の主体的な学びが継続して保障されるよう、市としてもサポート体制の強化を図っていく必要があると実感した。

・利用者の方々の様子も拝見できて参考になった。

・単なる補助の関係作りでなく、ソフト・ハード両面で市と民間の協働体制づくりを進展させ、全国モデルになるよう積極的な関係性構築を市に求める。

【舞鶴市教育支援センター明日葉】

〈 対応いただいた方 〉

教育支援センター長様他2名

〈 委員の所感 〉

・舞鶴市教育支援センター「明日葉」は、平成16年4月に開設され、不登校やいじめなど様々な要因により学校生活への適応が困難となっている児童生徒とその保護者を支援する施設である。

「自分らしい歩みで社会的自立へ」「多彩な体験が自信に変わる」「地道な一歩の先にある未来」「結果を急がず、自立の土台をつくる」を基本理念に掲げ、一人ひとりの状況や課題に寄り添いながら、児童生徒の社会的自立を目指した支援を行っている。

【支援内容】

・教育支援センター「明日葉」では、学校へ行きたいという気持ちはあるものの、不安や心理的要因などにより登校が難しい児童生徒を対象に、学校復帰だけを目的とするのではなく、社会的自立を見据えた支援を実施している。

具体的には、集団生活への適応力の向上、情緒の安定、基礎学力の補充、基本的生活習慣や社会性の育成など、一人ひとりの課題に応じた個別支援を行うとともに、安心して

過ごせる居場所づくりにも取り組んでいる。

・また、児童生徒だけでなく保護者への相談支援も重視し、家庭との信頼関係を築きながら支援を進めている。

【関係機関との連携】

・「明日葉」と「いじめ相談室」は、二つの相談窓口として密接に連携し、不登校やいじめをはじめとする様々な悩みに対応している。

さらに、各学校の校長、教育相談担当、スクールカウンセラー、学び生活アドバイザー、スクールソーシャルワーカーなど、多職種が連携しながら児童生徒への支援を行っており、必要に応じて関係機関とも情報共有を図ることで、切れ目のない支援体制を構築している。

・民間のフリースクール視察後ということもあり、施設内はやや手狭で、職員室が職員室らしさが目立つ印象も受けたが、15 人もの児童生徒が通所されている実績からも、基盤体制がしっかり整っていることが感じた。

・今後、中舞鶴総合会館に移転されるにあたり、多くの人が出入りする場所となる点について懸念もあった。しかし、人目に触れたくない児童生徒の居場所としての「聖母の小さな学校」、主体的な学びの場として選択する「よのなか塾」、週 1 回ながら家庭全体に寄り添う「彦一郎」といったように、子どもの気持ちや特性に応じた多様なフリースクールを選択できるようにしていくことが重要であると思う。

・舞鶴市教育支援センター「明日葉」については、少し、他の 3 か所とはちがったイメージがあった。公的施設と民間施設との違いみたいなものを感じた。うまく言えませんが、フリースクールはフリー、公的施設は公的だけあって、学校と似た感じといったらいいのか、学校復帰がフリースクールより少し色濃くといった感じだろうか。

・舞鶴市教育支援センターが中総合会館に移転する計画だが、他の選択肢はなかったのかと疑問を持った。会議室の何室かを使用されると思うのだが、それでいいのかと疑問だ。今よりも子どもに寄り添った施設が求められているのではと現在の施設を見学し、強く思った。

・市としてこの施設の必要性は必ずあると理解している。しかし、どうしても「陰と陽」と言うと「陰」の要素が強く、様々な要素を含むこうした課題に対する印象が悪く伝わる。活動内容が絶対に悪いのではなく、当たり前の内容になっていないか、一皮むけた取組に挑戦できるのか、現状のままでは、急激な課題の拡大に追いつけない感覚が私にはある。

・今後、中総合会館への移転集約を検討されているが、大人の集約化が目立ち、子ども目線で取り組まれているのかは甚だ疑問に感じる。予算がどれくらいかかるのかも予想できないが、予算の問題ではないと強く感じており、教育委員会ひいては市の考え方の大きな分岐点になると考える。

・舞鶴市教育支援センター「明日葉」・「いじめ相談室」は平成 16 年 4 月に開設され、今年度で 22 年目を迎えるセンターだ。令和 7 年度もいじめに関する相談件数 89 件、不登校に関する相談 546 件報告されている。

・不登校といっても、不登校になった児童生徒には様々な要因があると理解している。また、一人ひとりの要因の解決には時間と多数の関係者との関わりが必要になってくる

とからも大変なご苦勞をされていることと理解している。

〈 視察を実施した効果等 〉

- ・舞鶴市教育支援センター「明日葉」では、「学校へ戻すこと」を目的とするのではなく、児童生徒一人ひとりの状況を丁寧を受け止め、社会的自立を見据えた支援を継続している点が印象的であった。

- ・特に、「結果を急がず、自立の土台をつくる」という考え方は、不登校支援において非常に重要であり、安心できる居場所の提供や多様な体験活動を通じて自己肯定感を育み、自信につなげる支援が実践されていた。

- ・また、「明日葉」と「いじめ相談室」が連携し、学校やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど多くの関係者が情報を共有しながら支援する体制は、児童生徒を孤立させないための大きな強みであると感じた。

- ・今後、舞鶴市においても、不登校児童生徒が増加する中で、学校復帰のみを目標とするのではなく、児童生徒の社会的自立を第一に考えた支援体制をさらに充実させるとともに、教育・福祉・家庭が連携した切れ目のない支援を推進していくことが重要であるとする。

- ・「明日葉」においては、中総合会館への移転に伴い、子育て応援課や社会福祉協議会等と連携強化を図ることで、不登校の中でも特に家庭内に課題を抱える事例に対して、より深く寄り添った運営を行う役割が期待される。

また、社会全体として、「不登校は恥ずかしいことでも、困った行動でもなく、フリースクールに通うことは前向きな選択肢の1つである」という認識をより広く周知していく必要があると感じた。

- ・本年、先進地視察した内容をしっかりと委員会でもまとめ、このままでは不登校の減少は難しい現状が打破できるよう、取りまとめ提言すべきである。

- ・私は、教育の現場で SOS を発信している児童生徒の早期発見、早期対応につながる取組ができるようになっていかなんかと思っている。

- ・いじめや不登校の児童生徒の対策等を考えることも重要と思うが、少子高齢化が進行していく中で、少しでも舞鶴の宝である子どもたちの成長のためにも、センターの方針・施策が重要と考えている。



〈視察を通して〉

いずれの施設の取組も、不登校児童生徒への対策の取組の参考となる部分があり、今後参考にすべきとの所感が寄せられていることから、今後、本委員会において議論していくこととしたい。

また、本年の重点事項について、引き続き所管する委員会として注視し、より効果的な施策となるよう、市への政策提言に向けた議論を重ねていくこととする。

《参考：本年の重点事項》

- ・夢に向かって将来を切り拓く子どもを育成するための環境づくりに関する調査・研究
 - (１) 確かな学力の育成
 - (２) 児童生徒の不登校への対策